



復活徹夜祭 (ルカ 24:1-12)

朽ちていく者から朽ちない者へ

主の御復活おめでとうございます。浜串小教区の皆様と御復活のあいさつを交わすことができるのは今年が最後ということになります。今年の復活徹夜祭のメッセージから、浜串小教区の皆さんへの最後の呼びかけを見つけてみたいと思います。

ルカ福音書の復活の出来事の始まりは、婦人たちが連れ立ってイエスのご遺体が納められた墓に向かうところから始まります。ルカ福音記者は女性の活躍を前面に出していましたが、墓に向かった女性の数はほかの福音書とは違って大所帯となっています。

婦人たちが出かける理由ははっきりしていません。イエスはたしかに十字架の上でお亡くなりになり、墓に埋葬された。墓に納められたご遺体に香料を塗り、最後のお別れをしに行くためでした。婦人たちにできる最後のお世話をするために出かけようとしていたのは疑いようがありません。

ところが、墓には主イエスの遺体が見当たりません。途方に暮れていると輝く衣を着た二人の人がそばに現れ、「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」(24・5-7)と語りかけます。

婦人たちは何が起きているかはわかりませんでした。とにかく十一人のもとへ一部始終を知らせに行きました。この時点では墓で出会った二人の人に言われるがままに行動していましたが、すでに婦人たちの行動は新しいものにすっかり変えられていました。それは、もはや準備した香料は必要なくなったということです。イエスを、朽ちていく人間がいる墓に探す必要がなくなったのです。

しかしまだ、婦人たちが起きていることを理解するには時間が必要でした。使徒たちも同じことでした。彼らは婦人たちの言葉をたわ言としか受け止めていませんでした。それでもペトロは立ち上がって墓へ走ります。墓の中をのぞき込むと亜麻布しかありませんでした。ペトロも、出来事を十分には理解できませんでしたが、イエスは朽ちていく人間の一人ではなくなったのだと驚いたのです。

ルカ福音記者は、第24章全体を使ってイエスの復活を語るのに空の墓の出来事にはイエスは登場しません。しかし少しずつ、イエスを信じ、イエスに従った人たちの考えは変わり始めています。

イエスは十字架の上で確かに亡くなられたが、朽ちていく人間の運命にはおられない。自分たちはこれまで亡くなった人間がどのようなようになっていくのかを考えて、朽ちていく運命を頭の中で描いて動いていた。けれども、もはや朽ちていくことに囚われてはいけないうのです。

わたしたちは頭をまず、朽ちていく考えから切り替えて、復活して生きておられるイエスに向けていく必要があるのです。万物はいつか滅びていきます。わたしたちの頭は、どこかでこの「すべてのものが滅びる」という考えの中で物事を考えてきました。けれども今は、逆らいようのない自然の摂理に立ちはだかる必要があるのです。

すべてが滅びる中で、滅びないものがあることを、イエスが教えようとしておられるからです。今年の復活徹夜祭の学びは、ここにあると思っています。すべてが滅びます。けれどもわたしたちは、滅びないものを一つ信じることができるのです。それはイエス・キリストです。

この社会の急速な変化は、永遠に続くものなどないかのようです。子供がたくさんいた時代は去り、数えるほどしか子供はいなくなりました。その土地にあった作物を収穫し、そこそこの生計が成り立っていました。今は買って来たほうが安く感じているかもしれません。

海は取り尽くせないほどの恵みをもたらしてくれていましたが、もはや獲り尽くしてしまいました。かつてのクリシタンは外海地方から五島へと夢を抱いて移住しました。今は多くの若者が五島を出ていきます。

たくさんの思い出が、今や昔話です。けれどもイエスの復活は、滅びないものがあることをもう一度呼び覚ましてくれるのです。滅びるものにすがりついて現状を打破しようとしても、足元をすくわれるだけでしょう。むしろ、滅びないものを一つだけ知っているのですから、ここに望みを託して、生活全体を切り替えていく必要があるのではないのでしょうか。

主任司祭も変わります。人事という、この世の仕組みだからです。けれども、イエス・キリストという一人の羊飼いのもとに、イエス・キリストの代理として民を導く主任司祭が与えられます。ここは変わらない真実です。

行き詰って、にっちもさっちもいかないという時、どうか皆さん、滅びぬものは何かを思い出してください。復活し、滅びぬものとなられたイエス・キリストはどのように前に進んでほしいと願っているか、考えてみてください。ここに、進むべき道は開けてくると思います。

墓で出会った二人の人は、婦人たちにこう言いました。「まだガラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。」(24・6) わたしたちが仮に倒れ、失望しても、思い出すべきなのはイエス・キリストなのです。イエス・キリスト、復活して、滅びぬものがここにあると招くこのお方に、探すべき答えがあるのです。

幼い頃語り継がれた信仰、親となって子に語り聞かせた信仰。祖父母になり、孫たちに語り、孫たちが教会から聞いてきたことに耳を傾ける素朴な信仰。ここに、思い出すべきものがあるのではないのでしょうか。

いまわたしたちの心には復活の灯であるイエス・キリストの光がともされています。「まだガラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。」(24・6) 自分自身に言い聞かせ、また人々にも語る勇気のたまものを、復活した主に願いまししょう。